

第2回 生活科研究部研修会

『気付きの質を高め、架け橋となる生活科授業の創造』

令和7年8月1日

講話「新たな教育課程を見すえ、浜松の生活科授業を構想する

～低学年2年間の系統性と学びの個性化～」

愛知教育大学 教授

現行の学習指導要領の分析から、子供が主役の学びを展開し、探究的に学ぶ時間を位置付けた、生涯探究時代を見すえた教育課程へ向けて動き出している。生活科においては、保幼小連携推進事業を継続し、架け橋期カリキュラムの開発、指導の個別化と学びの個性化を確立し、多様な子供への対応が必要とされている。



<実践紹介>

事例1 安城市立三河安城小学校

1年生「それ行け！三河安城小探検隊～学校探検に行こう～」

三河安城小マイプラン学習（自由進度学習）を展開している。自分の行きたいところや誰と（あるいは一人で）行きたいかを自分で決め、自由に学びを進めていいことを順守し、子供の心が動くような体験ができる場を設けている。学校探検を通して、これまでの発見からさらに自分の気付きを深め、学校にはいろいろな施設や自分たちの学校生活を支えてくれる人がいることに気づき、学びの自覚化を図る。振り返り（自己内対話）を通して、自分の思いや願いを繋げていく。

事例2 大分県佐伯市立渡町台小学校 1年生「カタツムリとなかよし」

1年生の5月第2週の実践（架け橋期カリキュラムの具現化）

渡町台幼小モデルプラン学習では、対象（カタツムリ）と子供の活動の中で生まれる学び合いより教科横断的なカリキュラムデザインで構想されている。教科（生活科、図画工作科、音楽科）、内容（表現、言語、自然）をつなげている。対象が自分にとって特別な存在になれば、課題解決（思いや願いの実現）に向かって働き出す。

事例3 名古屋市立春田幼稚園 「サツマイモの収穫から多様な遊び（学び）へと発展」

- ・サツマイモの数を数える。
- ・サツマイモのつるで縄跳び。電車ごっこ。

事例4 住吉小学校

2年生 「レッツゴーたんていだん～町のすてき・びっくり・はてなをさがせ～」

町の調査での気づきを伝え合い、コースに合った名前を考えた。友達との学び合いによって多様な考えが加わり、自分の最適解（思考）に根拠（判断）をもって顕在化（表現）した。教師の切り返し、見守り、価値付けなどにより気づきの質が高まった。

事例5 豊川市立牛久保小学校 2年生「きらっとさん」

1学期は、教師が指定した場所へ学級全体で繰り返し何度も町探検に出掛け、かかわり地図に表現する。（30時間） 2学期は、自分だけが知っている「きらっとさん」を地図や紹介カードに表現する。繰り返し、体験（町探検）と表現（対話と自覚化）を通し、地域への愛着を積み重ねていく。

実践発表 1

自己調整しながら学習を進める中で、気づきの質を高めることを大切にした授業
「2年 うごく うごく わたしのおもちゃ～あそんでわくわく！ えがお大きくせん～」
の実践を通して

発表者：河輪小

「①自分が楽しむおもちゃを作る」「②友達も楽しめるおもちゃになるように改良する」「③1年生でも楽しめるおもちゃになるように更に改良する」と、小単位ごとに目標を変化させた。これにより、自己調整学習の基盤である「予想→確認→見直し」というサイクルで学習を進めることができると考えた。おもちゃという身近な題材で友達と協働しながら試行錯誤を繰り返し、楽しみながら遊びを創出する主体的な態度が育まれることを期待した。



《実践》

（1）用意した材料と十分にかかわる時間の確保

各自持ち寄った材料で遊ぶ時間を2時間用意した。教師の「この材料でどんなことができるかな？」の発問に対し、材料の特徴を捉え、様々な遊びを創出させた。

（2）気づきを理科の学習へつなげる工夫

児童の気づきを全体で共有し、教師が簡単な言葉に言い換えた。

- ①ゴムの力（ゴムの伸縮性）
- ②風の力（送風力）
- ③じしゃくの力（磁石の反発・引き合う力）
- ④空気の力（圧力）

(3) 場の設定

活動場所は、机や椅子を撤去した「生活室」と「会議室」に設定し、座る位置や制作場所は指定しなかった。同じ「〇〇の力」を選んだ児童同士が自然と一緒に活動したり紹介したりして遊び合ったりした。やりたいと思ったことがすぐに試せる環境は、児童の自己調整力を伸ばす一助になった。

(4) 自己調整力を働かせながら学習に取り組むための工夫

すべての活動の中で「予想する→確認→見直し」というサイクルを取り入れた。一人の悩みを全体で共有し、どの児童も次時の目標を設定して活動を終えることができた。言語表出の苦手な児童には、教師が児童と児童をつなぐ架け橋になるようにし、児童同士が自然と関われる環境を作った。

(5) カリキュラムマネジメントの工夫。

国語科「そうだんにのってください」（話す・聞く）の学習、算数「長さ」では、ものさしの学習が生かされていた。また、おもちゃの作り方の説明文を、オンライン交流会で砂丘小学校の児童に紹介した。教科横断的な学びは学ぶ意義を実感し、気付きの質を高める上でも役立った。

成果と課題

- 教科書にはないオリジナルのおもちゃを創出した。
- 「〇〇の力」を押さえたことで4つの力の理解が深まり、次年度の理科へつながった。
- 授業の終わりに、次時の目標を立てることを徹底したことで、「自己決定力」を高めることができた。
- 学習サイクルを繰り返したことで、児童の気付きの視点を広げたり、質を高めたりすることができた。
- 活動場所を2か所にしたため、児童の見取りが難しくなった。
- 小単元③を「1年生のために」としたことで、簡単に改良する必要があった。教師の関わりを再考する必要を感じた。
- グループによって進度が様々であり、他者と関わる時間を個別に設定するべきだった。

実践発表2

主体的・対話的な学びを通して気付きの質を高める生活科授業の創造
～2年生「みやこ田の『すてき』をみつけよう!」の実践を通して～

発表者：都田小

都田の「すてき」を見付けるために、繰り返し町探検に出掛けた。発見したことや気付いたことをカードに記入し、みんなに伝えたいことを考えていく中で、地域にある場所や物だけでなく、地域の人や人々のしていることや思い、工夫などに気付くことができると考えた。「都田のすてきなところを大切にしたいな。」といった地域への親しみや愛着がもてるようにしていきたいと考え、本テーマを設定した。



《実践》

(1) 子供の思いや願いの実現に向けた単元構想の工夫

単元を貫く問いとして、「都田の『すてき』を見つけよう！」を設定した。探検したい場所や質問したいことを、それぞれの思いや願いをもって、学習に取り組むことができた。様々な人に地域のよさについて知ってもらいたいという思いから学習発表会で他学年や保護者の方に伝え、広めた。

(2) 主体的・対話的な学びを実現し、気付きの質を高めるための支援・手立て

①グループ活動 自分と友達の考えを共有、比較することで、新たな気付きや思いを生むことができた。

②地域やお店の方との交流 町探検 1 回目の施設を見学するだけでは分からないことが多くあったが、お店の方と交流する中で新たな気付きや疑問が生まれ、もっと知りたいという思いにつながり、主体的に学習に取り組むことができた。

(3) ICT の活用

一人一台デジタルカメラを使用し、自分の気付きを写真に記録した。友達との共有時には、タブレットのオクリンクプラスを活用し、カードにまとめた。

(4) 毎時間の振り返り

毎時間の終末に振り返りの時間を設け、児童の気付きを言語化し、蓄積することで、自己の変容や気付きの変化を実感できた。自分との対話にもなり、気付きを自覚することにもつながった。

成果と課題

- 訪れた場所の方と事前打ち合わせを行い、学習の目的を共有していたことで、有効な話をしてくれた。その結果、気付きの質を高めることにつながった。
- 子供たちの調べたい場所に行き、町探検を繰り返し行ったことで、主体的に学習に取り組むことができた。また、気付きの質を高めることに繋がった。
- デジタルカメラやタブレットを活用し、自分の気付きを視覚化できた。
- 毎時間、振り返りを書くことで、自覚された気付きになり、次時の活動の意欲につながった。

- キャリア教育の目標と教科の目標の重なりが大きく、単元を通して子供たちも自覚できていたことでキャリアプランニング能力も高めることができた。
- 単級であるため、全員で同じ場所を回った。ボランティアの声掛けが課題である。
- グループの話し合いの質を上げる必要がある、話し合う目的や視点を明確にしていきたい。
- 児童の思いや願いをすべて実現するために、どのような形態をとるとよいか、考えていきたい。

実技研修 「生活科の授業で使えるおもちゃ作りⅡ」

浜松科学館 チーフエドューケーター

昨年度に引き続き、浜松科学館「みらい〜ら」のチーフエドューケーターを招き、「生活科の授業で使えるおもちゃ作りⅡ」と題して、実技研修を行った。子供だけでなく、保護者にも応用できるコミュニケーションゲームや、自然科学が身近に感じられる工作を学び、楽しんだ。2学期の授業で生かしていきたい。



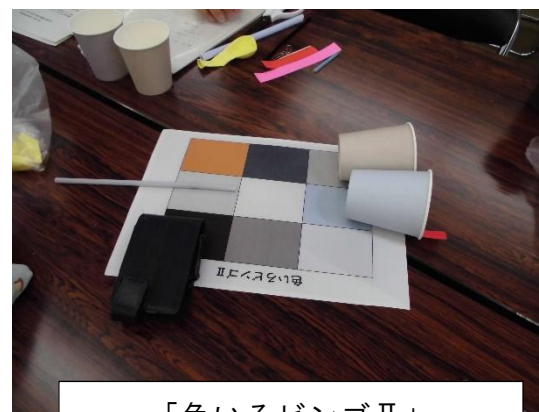
黄色いメガネがトレードマーク



「ブーブー風船」を製作中



「みんなで水玉コロコロ」



「色いろビンゴⅡ」